

学生の社会意識と宗教意識との関連 (上)

三 土 修 平

I. 序

筆者は先に、1996年に愛媛大学法文学部学生 286 名を被験者として実施した「社会意識に関するアンケート調査」の分析結果を発表した¹⁾。

その研究は、あらかじめ用意された政治的・社会的・倫理的テーマに関する 50種類の意見（以下では「意見項目」とよぶ）に対して、4段階の選択肢方式で学生が表明した賛成度を変量とみなし、その50個の変量のあいだの関係の構造について、因子分析の手法で分析を加えたものであった。

じつは、この「社会意識に関するアンケート調査」の質問項目は上記の50問だけではなかった。上記の50問は質問票の「第Ⅰ部」に記載されたものであったが、同調査には「第Ⅱ部」も設けられており、そこには学生の宗教意識を問う質問が10問（サブ・クエスチョンを除けば9問）設けられていた。その設問と選択肢は本稿末尾の付属資料のとおりである。同調査はもともと、学生の宗教意識が社会意識とどのような関係にあるかを明らかにすることを副次的目的として意識しながら設計したものであった。ただ、この「第Ⅱ部」は回答が質的データとなる性格のものであるため、量的データとして処理可能な「第Ⅰ部」の分析とはとりあえず切り離し、これの分析は「第Ⅰ部」の分析結果を得て十分な検討を加えた後の課題として、留保しておいたのである。

1) 三土〔4〕および〔5〕参照。

本稿では、まずこの「第Ⅱ部」の回答をそれ自体として分析したうえで、さらに「第Ⅰ部」の回答とのあいだの関連性についても検討する。このことを通じて、現代日本の学生層における宗教への関心が、一般的な政治的・社会的・倫理的テーマに対する意識とどのように交錯しているかを明らかにする一資料を提供することが、本稿の目的である。

筆者が当該調査を設計し、実施するにあたっては、近年「宗教と社会」学会によって大学生を被験者として組織的に実施されている「宗教意識調査プロジェクト」²⁾に参加した体験が、ひとつのきっかけとなっている。そのプロジェクトでは、短い調査期間のあいだに学生の宗教意識全般の概観を得ることが主眼とされているため、男女別や宗教系学校・非宗教系学校別などのクロス集計はあるものの、分析の大部分は単純集計であり、宗教意識相互間の関連についてはほとんど分析がなされていない。また、限られた回答時間の中で宗教意識全般について回答を得ることが主眼とされているため、設問は宗教的な問題に限られている。そのため、宗教行事に参加したり宗教的な考え方に共感したりすることが世俗社会の諸問題への意識とどう交錯しているのかという、社会心理学的には最も興味ある問題について、この調査からでは、解明の手がかりが得られない形になっている。

筆者は、これらの点に不満を感じたため、将来この種の意識調査にさらに改善を加え、分析を深める際の参考として役立つことを願って、とりあえずは小規模な個人的調査の範囲内で、社会意識と宗教意識との両面にまたがる調査を設計し、両者の相互関連について試行的な分析を実行してみたいと考えたのである。

2) この調査は1992年に第1回が実施されたものであるが、1996年に実施された第2回調査以降は、毎年、定期的実施が予定されている。第1回調査については、井上[1]および磯岡[2]が分析結果を報告している。筆者も参加した第2回調査については、石井[3]が簡単に言及している(pp.153-154.)。調査報告書は非売品であるが、発行所はつぎのとおり。〒150 東京都渋谷区東4-10-28 國學院大學日本文化研究所内、「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクト。

なお、筆者の調査と類似した社会意識一般についての調査は、わが国ではすでに少なからず実施されているし、宗教上の意識にウエイトを置いた調査も先例がある。それらのなかには分析手法として筆者と同じ多変量解析を用いているものもある。それらの先行業績と比較したときに今回の筆者の調査の特徴がどこにあるかを明らかにすることは、学術論文として当然要求されるところであるが、とりあえず筆者自身の分析の結果を速やかに示すことが目下の課題となっている関係上、本稿の(上)では、論述をこの点にしぼり、先行業績への詳しい言及は(下)に譲ることにする。

現今のわが国の社会での宗教をめぐる一般的状況や、そのなかでこの調査を実施したことの意義などについても、(下)において論述することとする。

Ⅱ. 単純集計の結果

本調査の被験者は286名であったが、被験者のなかには「第Ⅱ部」の質問票を見落とした者もあったため、「第Ⅱ部」への回答者は被験者数よりもやや少なくなった。また、同じ「第Ⅱ部」の中でも調査票冊子のページの変わり目のせいで最後の3問だけを見落とした者が若干あったため、「第Ⅱ部」への回答は質問によって回答者数に差があり、262～275名であった。

まず、「あなたは宗教または修養団体の教えを信じていますか」との質問(表1)に対しては、日本の若者の特徴としてこれまでもしばしば言及されていることだが、「無関心」が最も多く、70.2%に達している。後に数量化して分析する際には、選択肢(a)と(b)を「肯定的」回答とみなして、配点1点を与えることにしたが、「肯定的」のうちの大部分は「家の宗教があるから、その儀式に参加する程度」というあまり積極的ではない姿勢のものである。「自分の信じる教えがある」との回答は(選択肢に「自分一人の個人的信条でもよい」という付帯条件をつけてカバー範囲を広げたにもかかわらず)きわめて少数の者しか選択しなかった。その原因としては、わが国では、みずからを特定組織宗教の信者であると認めることは、社交上不利な結果をもたらすことが多いの

で、信仰の表明にブレーキがかかるという理由が、考えられる。しかし、本調査では回答票の匿名性を保障することをあらかじめ被験者に告げているため、この点の心理的ブレーキはさほど強くはなかったはずである。にもかかわらず特定の信仰を表明した者が少ないところをみると、組織宗教への参加を嫌うという態度は、被験者のあいだで相当に顕著であると考えられる。

表 1 宗教を信じているか

		(a) 家の宗教の 儀式に参加	(b) 自分の信じる 教えあり	(c) 無 関 心	(d) 宗教を否定 する思想	(e) そ の 他	計
性 別	男	39 (20.6%)	8 (4.2%)	128 (67.7%)	8 (4.2%)	6 (3.2%)	189 (100%)
	女	17 (19.8%)	1 (1.2%)	65 (75.6%)	1 (1.2%)	2 (2.3%)	86 (100%)
計		56 (20.4%)	9 (3.3%)	193 (70.2%)	9 (3.3%)	8 (2.9%)	275 (100%)

(c)+(d)=否定的(配点0), (a)+(b)=肯定的(配点1)

なお、「自分の信じる教えがある」と回答した者(275名中9名)だけに対して、自由記述の形でその「教え」について質問した第2問では、具体的教団名を書いた被験者は1人もいなかった。

「宗教の主たる存在意義は何だと思いますか」との質問(表2)に対しては、「人が人として生きるための根本の姿勢を教える」という信仰者の鑑のような回答は14.3%にとどまり、「信じることで心の安らぎが得られるという自己暗示のようなもの」という回答が多数を占めた。この「自己暗示のようなもの」という回答は、宗教それ自身の説く価値よりもむしろその世俗的効用を評価しているとみれば、世俗的な価値観を前提とした意見だと解釈できるので、後に数量化して分析する際には、この選択肢(a)を選んだ者は、(d)や(e)と一緒に「世俗的」回答とみなして、配点0点を与えることにした。ただし、「自己暗示のようなもの」ではあってもそれが自分にとっては真の心の安らぎだと回答者が考えているとすれば、宗教のもつ諸特性のうち世俗的効用を超えた何かをその

回答者は評価しているということになるので、この回答を単純に「世俗的」と決めつけてよいかどうかには、やや問題がある。なお、「世俗的」の反対概念としては「超越的」を考えることにして、選択肢(b)または(c)を選んだ者をそうみなすことにした。

表2 宗教の主たる存在意義は

	(a) 自己暗示の ようなもの	(b) 生きる根 本の姿勢	(c) 超自然界 との交流	(d) 支配者の 手段	(e) 社会の 潤滑剤	(f) その他	計
性 男	122 (65.2%)	34 (18.2%)	1 (0.5%)	11 (5.9%)	7 (3.7%)	12 (6.4%)	187 (100%)
別 女	74 (86.0%)	5 (5.8%)	0 (0.0%)	2 (2.3%)	1 (1.2%)	4 (4.7%)	86 (100%)
計	196 (71.8%)	39 (14.3%)	1 (0.4%)	13 (4.8%)	8 (2.9%)	16 (5.9%)	273 (100%)

(a)+(d)+(e)=世俗的(配点0), (b)+(c)=超越的(配点1)

「生まれ日の星座による性格判断について、どう思いますか」との質問(表3)に対しては、「当たるとは思わないが、遊びだとわかったうえで使うのなら無害だ」との回答が過半数を占めたが、「理由はわからないが、当たることもあるのは認める」という回答もある程度の割合を占めた。特に女子学生のあいだでこの回答の比率が34.9%と高く、よく指摘される女子学生の占い好き

表3 星占いについて

	(a) 非科学的で 嘆かわしい	(b) 遊びなら 無 害	(c) 当たるこ ともある	(d) 神秘的な 法則による	(e) その他	計
性 男	8 (4.2%)	140 (74.1%)	33 (17.5%)	4 (2.1%)	4 (2.1%)	189 (100%)
別 女	0 (0.0%)	52 (60.5%)	30 (34.9%)	4 (4.7%)	0 (0.0%)	86 (100%)
計	8 (2.9%)	192 (69.8%)	63 (22.9%)	8 (2.9%)	4 (1.5%)	275 (100%)

(a)+(b)=信じない(配点0), (c)+(d)=信じる(配点1)

を裏づける結果となった。この質問についても、後に数量化して分析する際には、回答を大きくくくって「信じない」(配点0点)と「信じる」(配点1点)に分けることにした。

『「虫の知らせ」』『死者が夢枕に立つ』『正夢(予知夢)』などについて、どう思いますか」との質問(表4)に対しては、「そういうことは確かにある」との回答が過半数を占め、「偶然に起こったことを、気のせいだそう解釈しているにすぎないと思う」を上回った。ここでも、女子学生のほうが肯定的回答が多かった。後に数量化して分析する際には、これらをそのまま「確かにある」(配点1点)「気のせい」(配点0点)とすることにした。

表4 「虫の知らせ」などについて

		(a) 確かにある	(b) 気のせい	(c) その他	計
性別	男	94 (49.7%)	75 (39.7%)	20 (10.6%)	189 (100%)
	女	56 (65.1%)	28 (32.6%)	2 (2.3%)	86 (100%)
計		150 (54.5%)	103 (37.5%)	22 (8.0%)	275 (100%)

(b)=気のせい(配点0), (a)=確かにある(配点1)

「臨死体験者が語る『意識が肉体から抜け出して、自分の肉体を外から眺める』という体験について、どう思いますか」との質問(表5)に対しては、「本人はそう感じたかもしれないが、ある種の錯覚だろう」との回答が51.3%と、わずかに半数を超えており、脳の生理学によって説明がつくとする唯物論的な見解の影響力が依然として強いことがわかる。ただし、「それは本当であり、死後の世界の存在の証明だと思う」との回答も30%に近づいている。ここでも、女子学生のほうが肯定的回答が多かった。後に数量化して分析する際には、「死後の世界の証明」という回答だけを「肯定的」回答とみなして、配点1点を与えることにした。

表5 臨死者の体脱体験について

		(a) 死後の世界 の証明	(b) ある種の 覚錯	(c) 虚偽の報告	(d) その他	計
性別	男	42 (22.2%)	103 (54.5%)	8 (4.2%)	36 (19.0%)	189 (100%)
	女	39 (45.3%)	38 (44.2%)	0 (0.0%)	9 (10.5%)	86 (100%)
計		81 (29.5%)	141 (51.3%)	8 (2.9%)	45 (16.4%)	275 (100%)

(b)+(c)=否定的(配点0), (a)=肯定的(配点1)

「古来、宗教の經典の中には、モーセがエジプトから脱出する途上で海の水が左右に分かれたという話(旧約聖書)のように、物理法則に反する現象が神の意志や祈りの力によって起こったとする報告が、多数存在しますが、それらは事実だと思いますか」との質問(表6)に対しては、「正しい宗教が説いているものは事実だが、邪教が説いているものは虚偽だと思う」という特定組織宗教の教義を体現したような選択肢を用意してみたが、これを選んだ者は275名中2名(0.7%)と僅少であった。「誇張も多いが、中には事実なものもあると思う」という回答が多くて過半数あり、「総じて事実ではなく、宗教を宣伝するための方便だと思う」という回答を上回った。ここでも女子学生のほうが

表6 宗教の説く奇跡について

		(a) 正邪の 区別あり	(b) 誇張もあるが 事実もある	(c) 教えの 方便	(d) 超物理 法則	(e) その他	計
性別	男	1 (0.5%)	95 (50.3%)	73 (38.6%)	6 (3.2%)	14 (7.4%)	189 (100%)
	女	1 (1.2%)	62 (72.1%)	18 (20.9%)	1 (1.2%)	4 (4.7%)	86 (100%)
計		2 (0.7%)	157 (57.1%)	91 (33.1%)	7 (2.5%)	18 (6.5%)	275 (100%)

(c)=否定的(配点0), (a)+(b)+(d)=肯定的(配点1)

肯定的回答が多かった。後に数量化して分析する際には、「教えの方便」という回答だけを「否定的」回答とみなして、配点0点とした。

「あなたは神社やお寺で、願い事が叶うように祈願したり、『お守り』や『おみくじ』や縁起物(破魔矢など)を買ったりしますか」との質問(表7)に対しては、「好きで、よくする」との回答だけを「積極的」とみなし、後に数量化して分析する際には、配点1点を与えることにしたが、この選択肢を選んだ者は17.1%とかなり少なかった。「たまにすることがある」という日本人のごく普通の行動を示した回答が最も多くて71.5%に達したが、その多くは習俗または遊びという気持ちでこのようなものにかかわっているものと思われる。「そういうことはしないのが自分の信念である」という選択肢は、浄土真宗などの教義的立場もしくは科学的唯物論の立場などを想定して設けた選択肢であるが、これを選んだ者は263人中11人(4.2%)と少なかった。このような点にも、学生層の大半が特定の教条に忠誠を尽くすような態度とは無関係な思想生活を送っている現状がうかがわれる。

表7 祈願や縁起物の購入

		(a) 好きで よくする	(b) たまにす ることがある	(c) しないのが 信念	(d) したこと がない	(e) その他	計
性別	男	27 (15.1%)	125 (69.8%)	11 (6.1%)	12 (6.7%)	4 (2.2%)	179 (100%)
	女	18 (21.4%)	63 (75.0%)	0 (0.0%)	3 (3.6%)	0 (0.0%)	84 (100%)
計		45 (17.1%)	188 (71.5%)	11 (4.2%)	15 (5.7%)	4 (15.2%)	263 (100%)

(b)+(c)+(d)=消極的(配点0), (a)=積極的(配点1)

つぎに、「戸別訪問による新宗教の布教について、どう思いますか」との質問(表8)が設けてあるが、これは、特定教団(ものみの塔聖書冊子協会)の布教活動を念頭に置いて作問したものである。現在のわが国では、この教団の戸別訪問布教はたいへん盛んであり、多くの人が1~2年に1度ぐらいの頻度

で、自宅の玄関にこの教団の布教者の訪問を受け、自分の問題として対処方法を考えねばならなくなる機会を経験する。その一方、もし被験者の中にこの教団の信者がいたとしても、多数を占めているとは思われない。したがって、筆者がこの設問で主として問いたかったのは、「自分の思想とは関係ないものだが、いつもしつこくやってくる例の戸別訪問布教者」というものに対して、学生がどのような考えを抱いているかである。つまり、他人の宗教活動に対してどの程度寛容の思想をもっているかを問いたかったのである。これに対しては、「住民に迷惑なので、法律で規制すべきだ」との回答だけを「規制派」とみなし、後に数量化して分析する際には、配点0点を与えることにした。この選択肢を選んだ者は22.5%と比較的少なかったが、この「規制派」には、宗教一般を嫌う合理主義者という側面と、自分にとって不愉快なことであれば他人の人権を制限してもよいという、やや軽率な強権発動賛成論者という側面との、両面が含まれていると考えられる。(b)と(c)の選択肢は「自由派」として、配点1点を与えることにしたが、この中に当該教団の教義そのものを好きだという者は少ないであろうから、選択の動機のかかなりの部分は「他人の人権を制限すれば、明日はわが身となるから、慎重でなければならない」という人権尊重の思想であろう。

表8 戸別訪問による布教について

		(a) 法 律 で 迷 惑 だ が 規 制 せ よ	(b) 迷 惑 だ が 規 制 には 反 対	(c) 大 い に や っ て よ い	(d) そ の 他	計
性 別	男	45 (25.3%)	111 (62.4%)	17 (9.6%)	5 (2.8%)	178 (100%)
	女	14 (16.7%)	63 (75.0%)	7 (8.3%)	0 (0.0%)	84 (100%)
計		59 (22.5%)	174 (66.4%)	24 (9.2%)	5 (1.9%)	262 (100%)

(a)=規制派(配点0), (b)+(c)=自由派(配点1)

最後に、『『新宗教の教祖』という言葉から、どんな人物を連想しますか』と

の質問(表9)も前問とやや似た動機から設けた質問で、宗教への寛容の態度や人権感覚などを問いたかったのである。これに対しては、「金銭やセックスへの執着が強く、人をだますことのうまい悪者」との回答だけを「決めつけ派」とみなし、後に数量化して分析する際には、配点0点を与えることにした。この選択肢を選んだ者は27.5%と比較的少なかったが、この「決めつけ派」は、世俗的合理主義者、還元主義者(ここで「還元主義」とは、精神的な理想・教義・教条などは物質的欲望に還元して説明できるとする思想)の傾向をもつ人々であろう。予想されたところではあるが、『教祖』といっても人によりけりであり、単一のイメージは持てない」とする回答が最も多く、62.2%に達した。

表9 「新宗教の教祖」について

		(a) 金銭やセックスに執着	(b) 人望があるが非常識	(c) 立派な人	(d) 一言に概ねない	(e) その他	計
性別	男	56 (31.5%)	6 (3.4%)	0 (0.0%)	109 (61.2%)	7 (3.9%)	178 (100%)
	女	16 (19.0%)	7 (8.3%)	1 (1.2%)	54 (64.3%)	6 (7.1%)	84 (100%)
計		72 (27.5%)	13 (5.0%)	1 (0.4%)	163 (62.2%)	13 (5.0%)	262 (100%)

(a)=決めつけ派(配点0), (b)+(c)+(d)=慎重派(配点1)

Ⅲ. 宗教意識相互間の関連

つぎに、これらの回答相互間の関連についての分析に入ることにする。

分析は、上に述べたような(表1～9の下に注記してある)方法によって、質的回答を数量化したものを基礎にして実行する。「その他」という回答をした者を除外すると、いまや各質問項目が0か1かの数値だけをとる量的変量として数量化されているから、各二項目間で2×2分割表を作成し、相関係数の計算および比率の差の検定を行なうことによって、質問項目間の関連の強さを

調べることができる。なお、数量化の際には、どの質問項目についても、宗教的な考え方を肯定するとか、他人の宗教的信念に対して寛容であるとかいった方向を1、そうでない方向を0としてあるので、相関係数 r が正であればその二つの宗教的意識は共鳴する方向にあり、負であれば背反する方向にあるということになる。また、比率の差の検定は有意水準5%と1%を節目として行なうこととし、危険度5%の水準で有意であるとき $p < 0.05$ 、1%の水準で有意であるとき $p < 0.01$ と示すことにした。

そのようにして、いくつかの興味ある組み合わせについて、 2×2 分割表を示し、相関係数と検定結果を付記したのが、表10～表17である。

表10 二項目間の関係

		宗教の主たる存在意義は		計
		世俗的	超越的	
宗教を信じているか	否定的	170 (87.2%)	25 (12.8%)	195 (100%)
	肯定的	49 (76.6%)	15 (23.4%)	64 (100%)
計		219 (84.6%)	40 (15.4%)	259 (100%)

($r = 0.1267$, $p < 0.05$)

まず、「宗教を信じているか」という変量は、他の変量と案外関係が薄い。「宗教の主たる存在意義は」という変量と若干連動し、「祈願や縁起物の購入」という変量とかなり強く連動するだけである(表10～表11)。「宗教を信じる」ことの内容が多くなると「家の宗教」という儀礼的もしくは習俗的なものであるため、同じく習俗的な意味あいの濃い「祈願や縁起物の購入」とは連動しても、他とは連動しにくいのであろう。この変量が「宗教の存在意義は」という変量と若干連動しているのは「宗教を信じる」被験者の中には、本気で超越的なものに関心を抱いている者が一部分含まれているためであろう。

表11 二項目間の関係

		祈願や縁起物の購入		計
		消極的	積極的	
宗教を信じているか	否定的	166 (86.0%)	27 (14.0%)	193 (100%)
	肯定的	43 (70.5%)	18 (29.5%)	61 (100%)
計		209 (82.3%)	45 (17.7%)	254 (100%)

($r = 0.1736$, $p < 0.01$)

「宗教を信じているか」が上記の2変量と連動しているからといって、上記の2変量そのものを直接に比較したときにも連動関係があると思っはいけない(表12)。みられるとおり「宗教の主たる存在意義は」という変量と「祈願や縁起物の購入」という変量とは、ほとんど無関係である。むしろ相関係数からいえば若干マイナスですらある。習俗的なものと超越的なものとの関連は薄いとみるべきであろう。なお、分割表の形では示さないが、「宗教の主たる存在意義は」という変量は他の変量とのあいだでも連動関係がほとんどなく、多くの変量とのあいだで相関係数がむしろわずかにマイナスになっている。

表12 二項目間の関係

		祈願や縁起物の購入		計
		消極的	積極的	
宗教の主たる存在意義は	世俗的	172 (81.9%)	38 (18.1%)	210 (100%)
	超越的	32 (84.2%)	6 (15.8%)	38 (100%)
計		204 (82.3%)	44 (17.7%)	248 (100%)

($r = -0.0217$, 有意差なし)

相関係数が顕著に正である組み合わせとしては『虫の知らせ』などについて」と「臨死者の体脱体験について」,『虫の知らせ』などについて」と「祈願や縁起物の購入」などがある(表13～表14)。概して「星占いについて」『虫の知らせ』などについて」「臨死者の体脱体験について」の3変量のあいだでは連動関係が顕著で、これらはひとつのグループをなしているといっている。このグループと「祈願や縁起物の購入」とのあいだや、このグループと「宗教の説く奇跡について」とのあいだや、さらにはこのグループと『新宗教の教祖』について」とのあいだでも連動関係は顕著であるが(表15),「祈願や縁起物の購入」や「宗教の説く奇跡について」や『新宗教の教祖』については別の変量とも連動関係をもつので、上記のグループの結束からはややみ出していると解釈できる。

表13 二項目間の関係

		臨死者の体脱体験について		計
		否 定 的	肯 定 的	
「虫の知らせ」 などについて	気のせい	92 (89.3%)	11 (10.7%)	103 (100%)
	確かにある	54 (43.5%)	70 (56.5%)	124 (100%)
計		146 (64.3%)	81 (35.7%)	227 (100%)

(r = 0.4757, p < 0.01)

表14 二項目間の関係

		祈願や縁起物の購入		計
		消 極 的	積 極 的	
「虫の知らせ」 などについて	気のせい	100 (98.0%)	2 (2.0%)	102 (100%)
	確かにある	102 (72.9%)	38 (27.1%)	140 (100%)
計		202 (83.5%)	40 (16.5%)	242 (100%)

(r = 0.3348, p < 0.01)

表15 二項目間の関係

		「新宗教の教祖」について		計
		決めつけ派	慎重派	
臨死者の体験について	否定的	48 (35.3%)	88 (64.7%)	136 (100%)
	肯定的	13 (16.5%)	66 (83.5%)	79 (100%)
計		61 (28.4%)	154 (71.6%)	215 (100%)

($r = 0.2015$, $p < 0.01$)

「宗教の説く奇跡について」は多くの変量と連動関係をもつ変量で、「戸別訪問による布教について」とのあいだでも連動関係が確認できる(表16)。「戸別訪問による布教について」という変量は他からの独立性が強い。戸別訪問による布教という、日本社会の標準からするとやや常軌を逸した宗教行動に対して寛容になれるのは、宗教の意義を超越的なものに見いだしている人々であろうかと考えて「宗教の主たる存在意義は」という変量とのあいだで分割表を描いてみたが、やはり無関係という結果が出ている(表17)。

表16 二項目間の関係

		戸別訪問による布教について		計
		規制派	自由派	
宗教の説く奇跡について	否定的	26 (29.9%)	61 (70.1%)	87 (100%)
	肯定的	29 (18.4%)	129 (81.6%)	158 (100%)
計		55 (22.4%)	190 (77.6%)	245 (100%)

($r = 0.1322$, $p < 0.05$)

表17 二項目間の関係

		戸別訪問による布教について		計
		規 制 派	自 由 派	
宗教の主たる 存在意義は	世俗的	45 (21.4%)	165 (78.6%)	210 (100%)
	超越的	9 (24.3%)	28 (75.7%)	37 (100%)
計		54 (21.9%)	193 (78.1%)	247 (100%)

(r = -0.0250, 有意差なし)

全変量間の関係を整理すれば、表18のようになる。表の中の数値は相関係数で、 $p < 0.05$ の場合に*印、 $p < 0.01$ の場合に**印で、有意差の存在を示してある。

表18 全項目間の相関係数と有意差の有無

	宗教を信じて いるか	宗教の主たる 存在意義は	星占いについて	「虫の知らせ」な どについて	臨死者の体脱 体験について	宗教の説く 奇跡について	祈願や 縁起物の購入	戸別訪問による 布教について	「新宗教の教祖」 について
宗教を信じて いるか	—	0.1267 *	0.0776	0.0334	0.0692	0.0519	0.1736 **	-0.0598	0.0021
宗教の主たる 存在意義は	0.1267 *	—	-0.0155	-0.0545	-0.0045	0.0082	-0.0217	-0.0250	-0.0219
星占いについて	0.0776	-0.0155	—	0.1354 *	0.2644 **	0.1953 **	0.0478	0.1017	0.1124 *
「虫の知らせ」 などについて	0.0334	-0.0545	0.1354 *	—	0.4757 **	0.2764 **	0.3348 **	0.0494	0.0979
臨死者の体脱 体験について	0.0692	-0.0045	0.2644 **	0.4757 **	—	0.3410 **	0.2443 **	0.0179	0.2015 **
宗教の説く奇 跡について	0.0519	-0.0082	0.1953 **	0.2764 **	0.3410 **	—	0.1530 **	0.1322 *	0.2915 **
祈願や縁起物 の購入	0.1736 **	-0.0217	0.0478	0.3348 **	0.2443 **	0.1530 **	—	0.0800	0.0324
戸別訪問による 布教について	-0.0598	-0.0250	0.1017	0.0494	0.0179	0.1322 *	0.0800	—	0.0185
「新宗教の教 祖」について	0.0021	-0.0219	0.1124 *	0.0979	0.2015 **	0.2915 **	0.0324	0.0185	—

この表にもとづいて、宗教意識全体の重なり合いぐあいを概念図としてまとめたものが、図1である。厳密に定量的な描き方ではないが、相関係数が正で有意差があるときに円どうしが重なるようにして、なるべく表18と整合的になるように宗教意識を平面上に配置してみた。その際、図を見やすくするために、「星占い」「虫の知らせ」「体脱体験」の三者はひとつの円にまとめることにした。

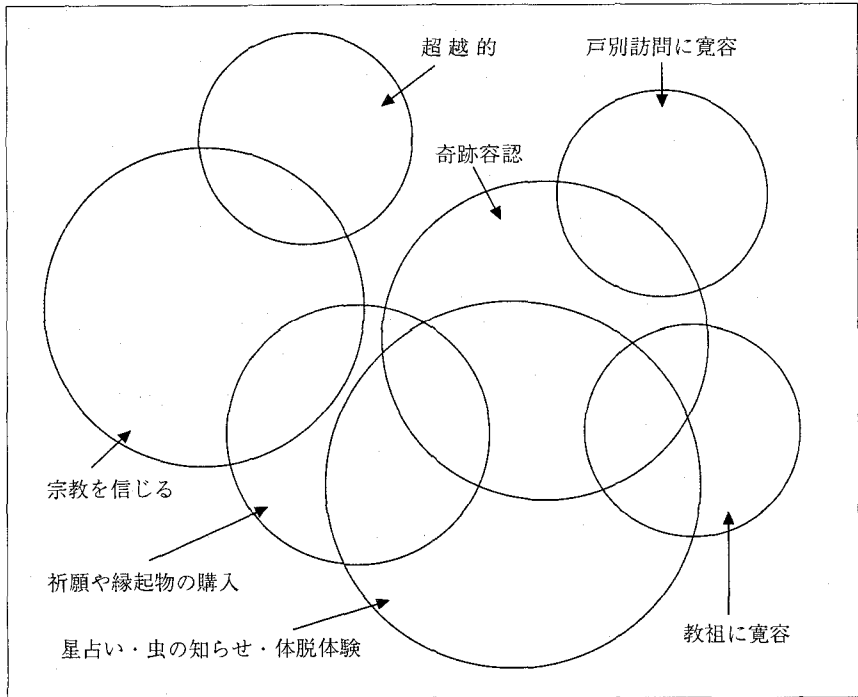


図1 宗教意識の重なり合いの概念図

この中核となる三者は、まとめていえば「必ずしも教義的ではない、遊戯的側面のある神秘主義」ということであろう。これを出発点にすえて全体の配置を説明してみると、以下のとおりである。

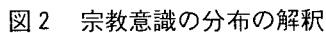
まず、「祈願や縁起物の購入」は、遊戯的な神秘主義の心理から行なわれて

いる面もあるが、純然たる習俗にすぎない面もあるので、中核グループと重なり合うと同時に、習俗的な意味での「宗教を信じる」とも重なり合っている。そして、「宗教を信じる」の中には一部分本気な信じ方もあるので、そうした部分がこんどは「超越的」と重なり合うことになる。

また、中核グループは神秘を容認するから、「教祖の中にもたまには本物もいる」と考えることになり、還元主義的な観点から「教祖」を決めつけることは少なくともしない。そこで「教祖に寛容」と重なり合うことになる。また、伝統的な宗教の經典に出てくるたぐいの奇跡も、現象としては現代のマスメディアなどに登場する神秘と同類であるから、中核グループと「奇跡容認」とは重なり合う。「奇跡容認」と「教祖に寛容」も当然重なり合う。「祈願や縁起物の購入」も、神秘的なものを肯定する立場から実行している人については、当然「奇跡容認」と重なり合うであろう。

「奇跡容認」が少し中核グループと異なる点は、この意識には、遊戯的要素からは多少離れた部分も含まれているという点である。設問は伝統宗教が説く奇跡について問いかけているものなので、それを素直に肯定する者の中には、宗教を、人生を生きる上での価値観の問題として、やや真剣に求める意識の者が含まれていると考えられる。その部分が、他人の宗教に対しても、賛否はともあれまじめに向き合うという「戸別訪問に寛容」の意識と重なり合っていると考えられる。このことが同時に、「超越的」とのあいだでも重複部分はないものの、距離的には近いという事実につながっていると考えられる（「宗教の説く奇跡について」と「宗教の主たる存在意義は」との相関係数は、わずかに正である）。

以上のように説明される概念図にさらに筆者なりの解釈を加え、整理したものが、図2である。概念図の下部中央あたりは「遊戯的」な宗教意識であると考えられる。中段左端あたりは「習俗的」な宗教意識であると考えられる。上部中央あたりは「伝統的」宗教意識であると考えられる。この場合の伝統的とは、伝統宗教が教義的立場として示してきたような、という意味である。右端の中段から上段あたりにかけては「カルト的」宗教意識が位置していると考え



Ⅳ. 宗教意識と社会意識との関関

さて、宗教意識の構造は以上のように整理されたが、それと調査票「第Ⅰ部」で調べられた社会意識との関係がどうであるかが、残された問題である。

それを分析するにあたって、「第Ⅰ部」の50項目全体と「第Ⅱ部」の諸項目とのあいだのクロス集計を逐一実行したのでは、作業量が膨大になって、収拾がつかなくなる。この状況を救ってくれるのが、因子分析にほかならない。「第Ⅰ部」のデータに対してすでに因子分析がほどこされ、8個の因子が析出されているという事実が、分析の見通しを飛躍的に向上させてくれるのである。

具体的には、宗教意識の9問のそれぞれに対する回答を例の0と1の数値に対応する2カテゴリーにまとめたうえで、被験者の回答属性別にみて、「第Ⅰ部」の因子分析から得られた因子得点の平均値にどのような偏りがあるかを、まず調べるのである。

その数値を示したものが表19であるが、ここで、因子分析における因子得点は被験者全体について（ひいては背後に想定される母集団の中で）標準偏差が1になるという想定のもとに算出された数量であることを勘案すると、平均値の差の有意性を検定することができる。つまり、宗教意識調査の各質問項目ごとに、回答属性によって分けられる2つの母集団があると想定し、2つの母集団からとられた標準偏差既知の2つの標本のあいだでの、標本平均の差についての片側検定問題として、問題をとらえるのである。厳密に言えば、それぞれの回答属性別の母集団のなかでの標準偏差が、全体の標準偏差である1に一致しているかどうかについても検討が必要であるが、ここでは、一致しているものとして考察を進めることにした。そのようにした片側検定の結果、平均値に危険度1%の水準で有意差があると判定されたものには**印、危険度5%の水準で有意差があると判定されたものには*印をつけた。

ここで、「第Ⅰ部」の因子分析によって析出された因子の意味づけと、因子得点の符号が正負のどちらであるときにその「意味」に対応する解釈が下され

表19 宗教意識の回答属性別でみた因子得点の平均値と差の有意性の有無

質 問 項 目	回答属性	被験者数	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	第7因子	第8因子
宗教を信じているか	否 定 的	206	0.005	-0.038	-0.028	0.008	0.030	-0.049	0.005	-0.039
	肯 定 的	68	-0.023	0.125	0.034	-0.059	-0.117	0.111	0.027	0.072
宗教の主たる存在意義は	世 俗 的	223	-0.005	-0.014	-0.003	-0.040	0.001	0.013	-0.007	0.008
	超 越 的	41	-0.071	0.100	-0.092	0.001	-0.107	-0.086	-0.178	-0.182
星 占 い に つ い て	信 じ 不 い	202	0.045	-0.045	0.022	-0.000	0.018	0.000	0.014	-0.017
	信 じ る	74	-0.117	0.143	-0.024	-0.023	-0.080	0.035	-0.047	-0.013
「虫の知らせ」などについて	気 の せ い	106	0.163	0.004	-0.008	0.057	0.130	0.066	0.068	-0.051
	確 かに 有 る	152	-0.083	0.003	0.017	-0.020	-0.113	-0.060	-0.094	0.018
臨死者の体脱体験について	否 定 的	151	0.068	-0.054	-0.027	0.019	0.024	0.017	0.063	-0.041
	肯 定 的	84	-0.186	0.125	-0.007	-0.125	-0.023	-0.060	-0.152	0.018
宗教の説く奇跡について	否 定 的	91	0.288	-0.054	-0.004	0.054	0.063	-0.060	0.104	0.074
	肯 定 的	172	-0.156	0.047	-0.008	-0.055	-0.056	0.013	-0.077	-0.085
祈 願 や 縁 起 物 の 購 入	消 極 的	216	0.035	-0.001	0.034	0.019	0.016	0.020	-0.010	-0.025
	積 極 的	45	-0.064	0.073	-0.134	-0.180	-0.013	-0.045	0.100	0.121
戸別訪問による布教について	規 制 派	58	0.206	0.079	0.034	0.021	0.264	0.160	-0.084	-0.017
	自 由 派	201	-0.030	0.004	-0.016	-0.012	-0.048	-0.038	0.023	-0.002
「新宗教の教祖」について	決 め づ け 派	72	0.199	-0.052	-0.008	0.037	0.135	-0.027	-0.007	-0.023
	慎 重 派	179	-0.091	0.060	-0.002	-0.041	-0.022	0.049	-0.015	-0.007

るのかを、復習しておく、つぎのとおりである。第1因子は「現実主義因子(+)」、第2因子は「理想主義因子(+)」、第3因子は「人権因子(+)」、第4因子は「生活者因子(-)」、第5因子は「集団主義因子(-)」、第6因子は「挑戦因子(-)」、第7因子は「事なかれ因子(-)」、第8因子は「律法主義因子(-)」である³⁾。

そこで、表19のなかの数値の意味については、たとえばつぎのような判定が下せることになる。

「宗教の説く奇跡について」の回答属性が「否定的」である者のほうが「肯定的」である者よりも「現実主義因子」を強くもっており、その差は危険度1%の水準で有意性をもつ。「戸別訪問による布教について」の回答属性が「自由派」である者のほうが「規制派」である者よりも「集団主義因子」を強くもっており、その差は危険度5%の水準で有意性をもつ。

このようにして、「第Ⅱ部」の宗教意識方面の9変量の動きととくに関連がありそうな「第Ⅰ部」の社会意識方面の意見項目は、第1因子負荷量の絶対値の大きい意見項目と、第5因子負荷量の絶対値の大きい意見項目とに、候補がしばられてくることになる。

そこで、第1因子の因子負荷量が顕著に正である意見項目として、「障害児中絶可」「ボランティアは売名」「死刑肯定」「自殺肯定」「空々しい建て前」「有力者を動かせ」「奉仕はほどほどに」の7項目を選び、また、第1因子の因子負荷量が顕著に負である意見項目として、「献血普及に協力」「出稼ぎ労働者に心痛」「社会への奉仕」「人事を尽くす」「徳福一致」「難民の苦を偲ぶ」の6項目を選んだ。さらに、第5因子の因子負荷量が顕著に負である意見項目として「金メダル感動」を選んだ。そして、これらの14個の意見項目と宗教意識方面の9変量(0と1に数量化したもの)とのあいだで、相関関係を調べることにした。

3) 三土[4] pp. 52-60.

分析にあたっては、社会意識方面の意見項目についても変量を加工して2カテゴリーにまとめ、それと宗教意識方面の変量との2×2分割表に対して、相関係数を計算し、比率の差の有意性の検定をするという手法を用いた。社会意識方面の意見項目を2カテゴリーにまとめるに際しては、原則として「少しもそうは思わない」と「どちらかといえばそうは思わない」をまとめて0点、「どちらかといえばそう思う」と「まことにそう思う」をまとめて1点とした。ただし、図6に出てくる「死刑肯定」と「宗教の説く奇跡などについて」とのクロスについてだけは、例外的に「まことにそう思う」だけを1点、他を0点とする分割を採用している。

このようにして、相関の正負と有意差の有無を調べたあげく、有意差のあった組についてだけ相関の符号と有意差の程度を示し、他は空欄としたのが表20である。例によって、危険度1%の水準での有意差を**印、危険度5%の水準での有意差を*印で示してある。

表19の結果からみて、「障害児中絶可」から「奉仕はほどほどに」までの意見項目（顕著に現実主義的な意見項目）は宗教意識方面の多くの変量とのあいだで負の相関がありそうだと予想されるが、おおむねそのとおりになっている。「献血普及に協力」から「難民の苦を偲ぶ」までの意見項目（顕著に現実主義と対立する意見項目）は宗教意識方面の多くの変量とのあいだで正の相関がありそうだと予想されるが、おおむねそのとおりになっている。そして、「金メダル感動」は予想どおり宗教意識方面の多くの変量とのあいだで正の相関がある。

例外は「宗教を信じているか」が「死刑肯定」とのあいだに正の相関をもち、「出稼ぎ労働者に心痛」とのあいだに負の相関をもつこと、および「戸別訪問による布教について」が「奉仕はほどほどに」とのあいだに正の相関をもつことである。ただし、その相関の程度はいずれも強くない。先に分析したように、本調査での「宗教を信じているか」に対する肯定的回答は、多分に習俗的な宗教意識に対応しているので、そういう意識の人は「凶悪犯人が死刑になるのは自業自得だ」とか「外国の出稼ぎ労働者が苦勞してもそれは本人の責任だ」と

表20 宗教意識と社会意識との相関

	障害児 中絶可	ボランティアは 売名	死刑 肯定	自殺 肯定	空々しい建 て前	有力者を動 かせ	奉仕はほと んどに	献血普及に 協力	出稼ぎ労働 者に心痛	社会への奉 仕	人事を尽く す	徳福一致	難民の苦を 偲ぶ	金メダル感 動
宗教を信じているか			+	*					-	*				
宗教の主たる存在意義は					-	*	**			+	**		+	*
星占いについて									+	*	+		+	**
「虫の知らせ」などについて	-	*					-	*				+	*	+
臨死者の体脱体験について	-	**									+	**	+	*
宗教の説く奇跡について	-	**	-	**	-	*		+	*			+	**	+
祈願や縁起物の購入											+	*		
戸別訪問による布教について	-	*			-	*	-	*	+	*				+
「新宗教の教祖」について		-	*					+	*			+	**	+

いった、既得権を守る側の人々の意見にあまり疑問を抱かないのであろう。「奉仕はほどほどに」という社会意識は、もともと宗教意識全般とのあいだにあまり顕著な対応関係をもたないので、「戸別訪問による布教について」とのあいだでも、予想されるような方向の対応がつかなかったものと思われる。

＊＊印のついた16組について、クロス集計をきちんと示したのが図3～図18である。ここでは、意見項目への賛成度は(1), (2), (3), (4)の数字で示してある。(1)から順に「少しもそうは思わない」「どちらかといえばそうは思わない」「どちらかといえばそう思う」「まことにそう思う」に対応している。帯グラフのなかの数値は上が実数、カッコ内が百分率である。

図3

障 害 児 中 絶 可

		(1)	(2)	(3)	(4)
臨死者の 体脱体験について	否 定 的 (153人)	12 (7.8)	36 (23.5)	84 (54.9)	21 (13.7)
	肯 定 的 (84人)	12 (14.3)	31 (36.9)	36 (42.9)	5 (6.0)

図4

障 害 児 中 絶 可

		(1)	(2)	(3)	(4)
宗教の説く 奇跡について	否 定 的 (92人)	5 (5.4)	21 (22.8)	44 (47.8)	22 (23.9)
	肯 定 的 (172人)	21 (12.1)	55 (32.0)	89 (51.7)	7 (4.1)

図 5

ボランティアは売名

		(1)	(2)	(3)	(4)
宗教の説く 奇跡について	否 定 的 (92人)	17 (18.4)	47 (51.1)	21 (22.8)	7 (7.6)
	肯 定 的 (172人)	31 (18.0)	114 (66.3)	25 (14.5)	2 (1.2)

図 6

死 刑 肯 定

		(1)	(2)	(3)	(4)
宗教の説く 奇跡について	否 定 的 (92人)	11 (12.0)	24 (26.1)	22 (23.9)	35 (38.0)
	肯 定 的 (172人)	23 (13.4)	52 (30.2)	61 (35.5)	36 (20.9)

図 7

自 殺 肯 定

		(1)	(2)	(3)	(4)
宗教の説く 奇跡について	否 定 的 (92人)	25 (27.2)	21 (22.8)	27 (29.3)	19 (20.7)
	肯 定 的 (172人)	66 (38.4)	54 (31.4)	33 (19.2)	19 (11.0)

図 8

空々しい建て前

		(1)	(2)	(3)	(4)
宗教の主たる存在意義は	世俗的 (223人)	16 (7.2)	44 (19.7)	111 (49.8)	52 (23.3)
	超越的 (41人)	6 (14.6)	13 (31.7)	12 (29.3)	10 (24.4)

図 9

社会への奉仕

		(1)	(2)	(3)	(4)
宗教の主たる存在意義は	世俗的 (223人)	15 (6.7)	107 (48.0)	93 (41.7)	8 (3.6)
	超越的 (41人)	4 (9.8)	10 (24.4)	23 (56.1)	4 (9.8)

図10

社会への奉仕

		(1)	(2)	(3)	(4)
星占いについて	信じない (204人)	22 (10.8)	95 (46.6)	77 (37.7)	10 (4.9)
	信じる (74人)		29 (39.2)	42 (56.8)	3 (4.1)

図11

人 事 を 尽 く す

		(1)	(2)	(3)	(4)
臨死者の 体脱体験について	否 定 的 (153人)	5 (3.3)	25 (16.3)	62 (40.5)	61 (39.9)
	肯 定 的 (84人)	5 (6.0)	35 (41.7)		44 (52.4)

図12

徳 福 一 致

		(1)	(2)	(3)	(4)
宗教の説く 奇跡について	否 定 的 (92人)	17 (18.5)	38 (41.3)	25 (27.2)	12 (13.0)
	肯 定 的 (172人)	13 (7.6)	62 (36.0)	63 (36.6)	34 (19.8)

図13

福 徳 一 致

		(1)	(2)	(3)	(4)
「新宗教の教祖」 について	決めつけ派 (72人)	12 (16.7)	31 (43.1)	20 (27.8)	9 (12.5)
	慎重派 (181人)	17 (9.4)	60 (33.1)	69 (38.1)	35 (19.3)

図14

難民の苦を偲ぶ

		(1)	(2)	(3)	(4)
星 占 い に つ い て	信 じ ない (204人)	16 (7.8)	24 (11.8)	80 (39.2)	84 (41.2)
	信 じ る (74人)	4 (5.4)	39 (52.7)	30 (40.5)	
		1 (1.4)			

図15

難民の苦を偲ぶ

		(1)	(2)	(3)	(4)
宗教の説く 奇跡について	否 定 的 (92人)	10 (10.9)	13 (14.1)	33 (35.9)	36 (39.1)
	肯 定 的 (172人)	15 (8.7)	79 (45.9)	73 (42.4)	
		5 (2.9)			

図16

金メダル感動

		(1)	(2)	(3)	(4)
「虫の知らせ」など	気のせい (108人)	7 (6.5)	17 (15.7)	34 (31.5)	50 (46.3)
	確かにある (152人)	12 (7.9)	66 (43.4)	69 (45.4)	
		5 (3.3)			

図17

金メダル感動

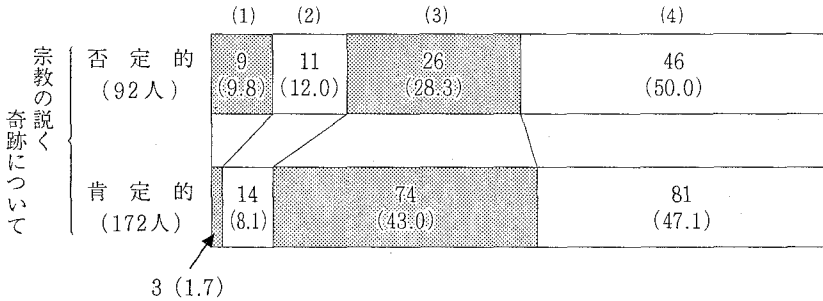
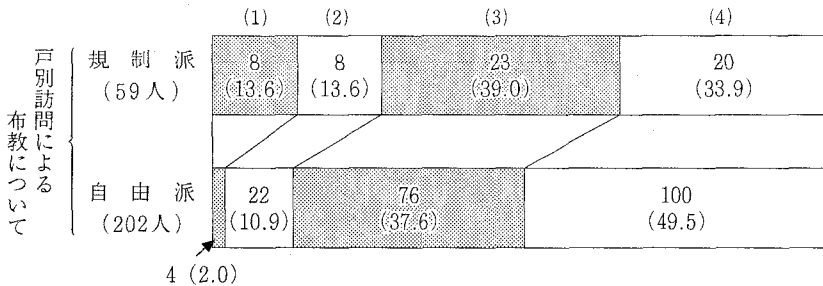


図18

金メダル感動



これらのなかには、「臨死者の体脱体験について」肯定的である者に「障害児中絶可」への反対者が多い（あの世があると思うから胎児にも霊があると思う）とか、『『新宗教の教祖』について』決めつけ派である者に「徳福一致」への反対者が多い（世の中は金と欲で動いていると考えている）とかのように、回答の裏の動機がよくわかるものもある。しかし、全体としては、直接のつながりはあまりわからないけれども、何はともあれ宗教的なものへの関心が、社会を金と欲の問題として割り切らずに、他人に対して温かい態度で接しようとする態度につながっているというケースが多い。

とくに、「宗教の説く奇跡などについて」肯定的な者と否定的な者とのあい

だで、社会意識面のかなり多くの項目について、有意に差のある反応がみられるのが、注目に値する。先に分析したように、この宗教意識のなかには遊戯的要素も含まれていると同時に、宗教を人間の生き方の問題として真剣に受け止める態度が含まれているが、そのことが、この有意差の原因になっていると思われる。

宗教を社会的な倫理に結びつけて考え、しかもたんなる「長いものには巻かれろ」式のあきらめを説くのではなく、温和だが主体性のある（場合によっては権力者との対決をも辞さない）倫理観を提唱してゆくというのは、仏教、キリスト教などの伝統宗教の多くが、少なくともその初心においては理想としていところである。現代の若者のあいだで、倫理的態度が奇跡容認の宗教意識と関連性をもつというところに、彼らのあいだにも伝統宗教の思想が何らかの形で影響を与えていることの、ひとつの証明が見いだされる。と同時に、明示的に「宗教を信じる」と回答した者の意識が、そのような倫理的態度とは無関係な意識になりおわっているというところに、教団に明示的に所属しているか否かや、本人が自覚的に宗教行動だと考えて行動しているか否かを判断基準にしたのでは、こうした影響力の存在は検出しえないことが示されている。

V. 本調査の限界と今後の展望

本調査は、「第Ⅰ部」の社会意識調査を因子分析の手法で分析することを主眼として設計されたものであったため、「第Ⅱ部」は設問自体が粗略であり、選択肢の作り方に拙速のそしりをまぬがれない部分もあった⁴⁾。宗教意識その

4) たとえば、本文中でも述べたように、第3問の「(a)信じることで心の安らぎが得られるという自己暗示のようなもの」という選択肢は両義的であり、回答者が宗教を自分にとって積極的意義をもつ真の心のよりどころと評価している場合にも、愚かな人たちの気休めにすぎないと冷やかに見下している場合にも、ともに選ぼうようなものになってしまっていた。また、第7問の「(d)宗教のあるなしにかかわらず、ある種の物理法則をあやつる力を身につければ、そういうことは可能になるのだと思う」という選択肢は、選択肢(b)を選んだ人へのサブ・クエスチョンとして問われるべき内容を表現しており、選択肢(b)とのあいだで択一的な選択対象としての資格を備えていない。第4問の選択肢(d)も、同様な理由により不適切であった。

ものの詳しい分析をめざす場合には、当然、再検討の必要がある。

また、本稿の分析で得られた宗教意識と社会意識との関連をふりかえてみると、社会意識方面の意見項目のうち、宗教意識とつながりがあると判定されたものは、もともと宗教の守備範囲に近いような倫理的問題についての意見項目にかざられており、それ以外の広範な社会問題についての意識と、宗教意識とのあいだのつながりについては、判然とした結果は得られなかった。そして、図3～図18の帯グラフを概観すればわかるように、有意差が検出された代表的なものをとってみても、その差はさほど顕著なものではない。

このような事実をみると、社会意識と宗教意識をいったん切り離して分析したうえで、二つの領域間の関連について、被験者集団全体のなかでの統計的な有意差の有無だけに着目して問題を分析しようとする方法自体に、限界があるということが、わかってくる。

筆者がこの調査を設計するにあたっては、「人権感覚と宗教意識」あるいは「近代合理主義的知性と宗教意識」といった問題が、背後に多少意識されていた。いま、手短かにいえば、以下のようなことである。

たとえば、戸別訪問による布教に寛容であるかどうかという問題は、日本国憲法などを前提にして考えれば、基本的には人権感覚の問題である。他人が自己の信念を広く社会に広めようとしてやっている活動を、公共当局に依頼して法的に規制してもらうようなことをすれば、「明日はわが身」である。このことを冷静にとらえる人ならば、相手の説く教義が自分にとって好ましく思えるかどうかという問題とは切り離して、布教の自由を認めるはずである。したがって、「戸別訪問に寛容」という宗教意識の背後には、「宗教や神祕にわりと関心がある結果として、布教攻勢にもあまり抵抗を感じない」というタイプの意識だけではなくて、「自分自身は宗教や神祕がけっして好きなわけではないが、人権問題の原則は譲れないという理由から、布教の自由を認める」というきわめて明晰な意識も混在しているはずである。

また、新宗教の教祖となるような人物に対して寛容であるかどうかという問題は、回答者が合理主義的な知性というものの役割を日ごろどれだけ深く反省

しているかに依存する問題である。自分自身は合理主義的な科学をよく勉強しているが、よく勉強しているがゆえにこそ、その限界もあることを感じているというタイプの人ならば、「教祖の活動は『色とカネ』だ」という週刊誌的な決めつけに簡単には同調しないであろう。つまりここでも、「教祖に寛容」という宗教意識の背後には、「宗教や神秘に漠然と関心があって、知的反省においては甘い」というタイプの意識と、「合理主義的な科学についてよく学び、反省してみている」というきわめて明晰な意識とが混在しているはずである。

このような問題意識に立って、筆者としては、「戸別訪問に寛容」や「教祖に寛容」という宗教意識と、社会意識の面での人権感覚などとの関連性をも導き出さなかったのである。しかし、結果としては、そのような関連性は検出することができなかった。これらの宗教意識そのものを背後から規定している複数の因子を析出する因子分析のような方法がとれなかったために、これらの意識はそれぞれ単一の変量として大ざっぱにあつかわざるをえなくなり、その結果として、「奇跡容認」や「遊戯的な神秘主義」との関連だけが強く前面に出てしまい、背後にあるかもしれないより複雑な関連は検出できなかったのである。このことが、図1や図2の右端領域を「カルト的」というやや不適切な概念でくくらざるをえない結果をもたらしたといえよう。本来ならば、筆者としてはこのへんの意識を「人権的」とくりたいところであったが、社会意識の分析から得られた「人権因子」とのあいだに有意な相関が確認できない以上、そのようによぶのは控えざるをえなかったわけである。

以上のようなしだいで、「第Ⅱ部」の宗教意識の部分の設問を質的形態にしてしまったために、この部分に因子分析が適用できなかったことが、本調査のひとつの限界をなしている。

と同時に、もうひとつ考えられることは、上に説明したような「自分の嫌いなものに対しても、人権問題の観点からは寛容の態度をつらぬく」とか「合理主義的な科学をよく勉強しているからこそ、その限界にも敏感である」とかいった明晰さを、被験者である学生層のうちのある程度多数の者に求めるのは、もともと無理ではないかということである。もしかすると、こうした明晰さは、

かなり少数の者にしか、もともと見いだせない性格のことがらであるかもしれない。その場合には、調査の設計をやり直しても、統計的にはそれが検出できないこともありうる。そうした場合には、統計的研究をうち切って、あらためて個別事例の研究へと向かわざるをえないであろう。

付属資料 社会意識に関するアンケート調査「第Ⅱ部」調査票

以下の設問について、選択肢に○をつける方式で答えなさい。ただし、「その他」を選んだ場合は具体的に記述すること。また、第2問だけは記述方式。

1. あなたは宗教または修養団体（一灯園，モラロジー，実践倫理宏正会，ヤマギシ会など）の教えを信じていますか。
- (a) 家の宗教があるから，その儀式に参加する程度
 - (b) 自分の信じる教えがある（仏教，キリスト教，新宗教，修養団体など，あるいは自分一人の個人的信条でもよい）
 - (c) 無関心
 - (d) 宗教を否定する思想（マルクス主義，無神論的実存主義など）を支持している
 - (e) その他（ ）
2. [全間で(b)と答えた人に] その教えは何ですか。なるべく詳しく答えて下さい。
- （例えば，「キリスト教・プロテスタント」「キリスト教・カトリック」「仏教・阿含宗」「仏教・霊友会」「天理教」「PL教団」など）
3. 宗教の主たる存在意義は何だと思われますか。
- (a) 信じることで心の安らぎが得られるという自己暗示のようなもの

- (b) 人が人として生きるための根本の姿勢を教える
- (c) 超自然の世界との交流によって、運命の予知などを可能にしてくれる
- (d) 支配者が民衆を自分の意のままにあやつるための手段
- (e) 親族や地域社会の人間関係をなごやかにする潤滑剤
- (f) その他 ()

4. 生まれ日の星座による性格判断について、どう思いますか。

- (a) 科学的根拠のないものだから、週刊誌などがああいうものを広めるのは
嘆かわしい
- (b) 当たるとは思わないが、遊びだとわかったうえで使うのなら無害だ
- (c) 理由はわからないが、当たることもあるのは認める
- (d) 現在の科学ではまだ解明されていない神秘的な法則があって、当たるの
だと思う
- (e) その他 ()

5. 「虫の知らせ」「死者が夢枕に立つ」「正夢（予知夢）」などについて、どう
思いますか。

- (a) そういうことは確かにある
- (b) 偶然に起こったことを、気のせいでそう解釈しているにすぎないと思う
- (c) その他 ()

6. 臨死体験者が語る「意識が肉体から抜け出して、自分の肉体を外側から眺
める」という体験について、どう思いますか。

- (a) それは本当であり、死後の世界の存在の証明だと思う
- (b) 本人はそう感じたかもしれないが、ある種の錯覚だろう
- (c) 虚偽の報告だと思う
- (d) その他 ()

7. 古来、宗教の経典には、モーセがエジプトから脱出する途上で海の水が左右に分かれたという話(旧約聖書)のように、物理法則に反する現象が神の意志や祈りの力によって起こったとする報告が、多数存在しますが、それらは事実だと思いますか。

- (a) 正しい宗教が説いているものは事実だが、邪教が説いているものは虚偽だと思う
- (b) 誇張も多いが、中には事実なものもあると思う
- (c) 総じて事実ではなく、宗教を宣伝するための方便だと思う
- (d) 宗教のあるなしにかかわらず、ある種の物理法則をあやつる力を身につければ、そういうことは可能になるのだと思う
- (e) その他 ()

8. あなたは神社やお寺で、願い事が叶うように祈願したり、「お守り」や「おみくじ」や縁起物(破魔矢など)を買ったりしますか。

- (a) 好きで、よくする
- (b) たまにすることがある
- (c) そういうことはしないのが自分の信念である
- (d) 特に信念はないが、したことがない
- (e) その他 ()

9. 戸別訪問による新宗教の布教について、どう思いますか。

- (a) 住民に迷惑なので、法律で規制すべきだ
- (b) 自分は迷惑に感じるが、法律で規制するのは信教の自由に反する
- (c) 受け入れるかどうかは聞く側の自由なのだから、大いにやってよい
- (d) その他 ()

10. 「新宗教の教祖」という言葉から、どんな人物を連想しますか。

- (a) 金銭やセックスへの執着が強く、人をだますことのうまい悪者

- (b) 精神療法などの能力があり、人望もあるが、非常識な面もある人
- (c) 修行を積んだ立派な人
- (d) 「教祖」といっても人によりけりであり、単一のイメージは持てない
- (e) その他 ()

参 考 文 献

- [1] 井上順孝「大学生における宗教教育への関心と宗教意識」國學院大學日本文化研究所編『宗教と教育』所収、弘文堂、1997、pp.145-185.
- [2] 磯岡哲也「宗教系大学生の宗教意識」同上所収、1997、pp.187-208.
- [3] 石井研士『データブック現代日本人の宗教』新曜社、1997.
- [4] 三土修平「学生の社会意識の因子分析」『愛媛経済論集』第16巻第2号、1997、pp.41-84.
- [5] 三土修平「学生の社会意識の因子分析(補遺)」『愛媛経済論集』第17巻第2号、pp.31-62.